

ケア24久我山だより

平成23年度 第1号

発行: 杉並区地域包括支援センター
ケア24久我山
(電話 03-5346-3348)
発行日: 平成23年4月26日



ケア24久我山に新しい職員が2名増えましたので、
自己紹介をさせていただきます！！



建神 智美

4月からケア24久我山に勤めさせていただいています建神智美（たてがみさとみ）です。今まではデイサービスなどでの相談員や他区でケアマネージャーとして働いておりましたが、縁があってこちらで働かせていただくこととなりました。ケア24では地域の皆様と関わらせていただく事になりますので、まず地域の事を知り、皆様の中にとけ込んでいけるように努力したいと思っております。まだ一か月ほどしか経っていませんが、毎日久我山に出勤してくるのが、楽しみです。皆様に教えていただく事ばかりと思いますが、私も皆様と共にこの地で頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

4月からケア24久我山に勤務しております、矢板律子（やいたりつこ）と申します。毎日久我山駅から神田川沿いに歩いて出勤しています。緑が多く穏やかな街の雰囲気癒されています。この1ヶ月は、仕事を覚えることに必死な毎日でしたが、地域のみなさまとたくさんお話をさせていただき、本当にいろいろ学ばせていただいております。みなさまにお力をお借りしながら、地域の住民の方々が安心して過ごせるような地域づくりに努めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

矢板 律子

ケア24久我山は、島田(センター長・主任介護支援専門員)、大久保(社会福祉士)、公文(看護師・介護支援専門員)、金子(介護支援専門員)を含めて、6名の職員がおります。地域の方々が住み慣れた地域で安心してお過ごしいただけるよう、職員一丸となって努力してまいります。これからもよろしくお願い致します。



ケア24久我山の地区では、以下の取り組みを支援しています

爽やかウォーキングの会

実施日時: 毎月第1水曜日10時~12時
集合場所: コースによって異なります。
問い合わせ: ケア24久我山
03-5346-3348(担当: 公文、矢板)

認知症を予防するという目的を持って、
月1回メンバーとともにウォーキングを実施しています。

「ウォーキングをしたいけれど、一人では続かない」
「同じ目的を持った人と交流を図りたい」
「楽しくウォーキングしたい」
そんなご希望をお持ちの方は、
一緒にウォーキングをしてみませんか。



スタッフから
ひとこと

4月のウォーキングに初めて参加させていただきました。ただ歩くだけではなく、皆様とのおしゃべりも楽しいものでした。最終目的地まで行かれる方や、私たちのように途中の目的地でお別れする方など、体調などに合わせて選択できますので無理なく参加できますね。(ケア24久我山 建神)

かけひさろん

実施日時: 毎月第2、4木曜日10時~13時
集合場所: ゆうゆう久我山館
問い合わせ: ケア24久我山
03-5346-3348 (担当: 公文、矢板)

かけひさろんは、皆さんで楽しくお話をしながら調理をし、お食事をしていただく会です。
年を重ねると、一人での食事や外出することが、億劫になったりすることがあります。そうすると体が弱ったり、物忘れが多くみられるようになったり…。
そのようなご不安がある方に参加していただき、楽しい時間を過ごしていただいております。



ゆうゆう久我山館・ケア24久我山共催

今回のテーマは…

～膝の痛みの話と予防の心得～

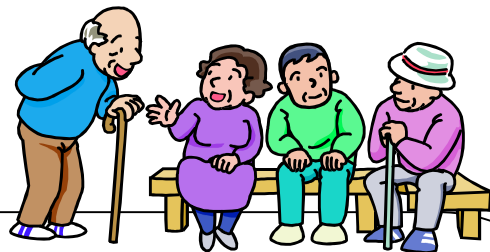
膝の痛みは、本当につらいですね。

そんな痛みを苦しんでいる方々が、少しでも楽になれるようなお話です。

膝の不具合やつらい痛みについて、対応策や予防策を知ることができ、

膝の痛みと付き合いながら、生活ができる方法を学びましょう。

ご参加、お待ちしております！



日時 : 6月14日(火) 13時～14時

場所 : ゆうゆう久我山館
(久我山5-8-8)

対象 : 区内在住の方 先着50名

費用 : 無料

講師 : 佐々木政幸氏
(久我山整形外科ペインクリニック 院長)

申込み: ゆうゆう久我山館 (電話 3332-2011)

お問い合わせ : ケア24久我山 (電話 5346-3348)





ボランティアについて考える

このたびの東日本大震災を契機に、改めてボランティアの意味が問われています。私たちのような福祉関連の仕事に従事している者は、多かれ少なかれ、日々ボランティアの皆さまのお世話になっています。にもかかわらず、これまではボランティアの意味を、あまり深く考えずに過ごしてきたのではないかと思います。

ご存じのように、ボランティアの発祥の地であるキリスト教国では、ごく最近までボランティアは義勇軍の同義語として認識されていました。有名なのはファシスト軍と共和側が戦ったスペインの内戦です。ヘミングウェイやアンドレ・マルローがボランティアとして共和側について戦ったことは、よく知られています。この場合、ボランティアは命を捨てる覚悟なのですから、善意や隣人愛では片付けられない峻厳なものがあります。

元々、ボランティアという考えが普遍的な意味を持ったのは、エルサレムの聖地を巡って当時のサラセン帝国と戦った十字軍の大遠征がきっかけだったと言われています。十字軍については、『アイヴァンホー』や『獅子王リチャード』といった絵物語やハリウッド映画でしか我々は知らないのですが、地理的に見ても、ヨーロッパから遙々エルサレムまで兵士を送り込むことは容易なことではなかったと想像できます。しかも100年以上も続いた大戦争ですから、国軍だけではとてもまかないきれません。こうして義勇軍が組織されたわけです。義勇軍に参加した兵士たちは、この戦争が宗教にまつわる戦争であったため、キリスト教の名の下に、何の疑問もなく、志願したのだと思われま

す。私たち日本人がボランティアというものを身近にしたのは、あのアメリカ軍による占領下であったことは、ある年代以上の方ならご記憶のことだと思います。私も小学生になったばかりでしたが、日曜学校や定期的に開かれるバザーなどには喜々として出かけたものです。今思えば、あれも占領軍によるボランティアの一環だったわけです。あの時代からすでに60年が経ちます。その間、わが国にも日本独自のボランティアが育ち、今ではボランティアなくしては社会が成り立たないほどの影響力を持つ存在になっています。

今回の東日本大震災は、日本のボランティアがはたして本物なのかどうか試される試金石ともいえます。日本は憲法で国教を定める国ではありません。つまり、宗教国家ではないということです。もちろん信教の自由が保障されているわけですから、一概に日本は無宗教の国だと決めつけることはできません。事実、多くの日本人が多様な宗教を信じています。とはいえ、日本人の多くは宗教の縛りから自由であることもまた事実です。実はこのような国家は、世界的に見ても例外的なのです。こういう国だからこそ、今回のような大惨事にあって、ボランティアがどのような役割を果たすのか、果たすべきなのか国民レベルで問い直す必要があると思われま

特別養護老人ホーム さんじゅ久我山
施設長 新井 達夫